

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 松浦寿輝

松浦寿輝氏の学位請求論文「表象と倒錯 エティエンヌ＝ジュール・マレー」は、副題にあるとおり 19 世紀フランスの生理学者エティエンヌ＝ジュール・マレー (1830-1904) の仕事を通して、西欧近代における「表象」と「イメージ」の問題を考察したものである。マレーは運動する物体 (多くは生物) の像を連続してとらえた写真 (クロノフォトグラフィ) によってその名をよく知られているが、これまでの研究ではその写真が未来派をはじめとする 20 世紀の美術表現に与えた影響や、静止画像の連続的投射である映画 (シネマトグラフ) の前史として語られることのみ多く、彼の仕事そのものに真正面から取り組んで、その意義を解明しようとする松浦氏の試みは、それだけでも十分高く評価されるべきものである。

論文はいずれも 3 章からなる 3 部によって構成されている。第 I 部「倒錯者マレー」では、写真を用いる以前のマレーが医学者－生理学者として、生体の運動を正確に図示することを追求していた 1860 年代の仕事が主として取り上げられる。運動を機械装置によって図表に翻訳するこの仕事は「クロノグラフィ」と呼ばれるが、松浦氏によればその最大の特徴は、解剖のように対象に直接はたらきかける「実験」も、また対象を外部の視点からとらえようとする「観察」もともに退け、ひたすら内部と外部との境界面に生起する事象の推移に目を注ぐ特異な視線である。生体の運動の「表象」の作成に向かおうとするこの欲望は、また「生命」の問題系の欠如によっても特徴づけられ、松浦氏はそれを「倒錯的」と形容する。「生氣論」と「機械論」の対立という一般的図式を排したこの見解は、同時代の科学的言説およびこれまでの科学史研究を丁寧に検討したうえで引き出されており、十分な説得力をもつと同時に、この倒錯性にこそ「表象」から「イメージ」への転換の契機があるとする氏の着眼は秀逸である。

内容的にも本論文の中心を占める第 II 部『『近代』の闕』では、運動表象のよりいっそうの正確さを追求するマレーが、その手段として写真を採用することによって、「表象」性それ自体をも逸脱してしまうという本論文の主要な論点が考察される。1882 年の「写真銃」の発明を転回点とする、この「グラフ」から「クロノフォトグラフィ」への移行行きを、松浦氏はマレー自身の比喩を用いつつ、「普遍言語への翻訳」としてのグラフが、そうした記号システムの媒介をもたない、ありのままの現実の「焼き付け」である「写真」に置き換えられることとしてとらえている。そして写真における無媒介的な「写し」の関係が、

言語に還元されえない特異なもの、「表象」を超えた過剰なものをそこにもたらし、ここでもまた倒錯的に「イメージ」として出現すると論じるのである。マレーの諸著作を丹念に検討しながら精緻に展開されるこの議論は、マレーの連続写真を見る者の感じるある種の違和感の本質をみごとに解き明かすものということができるだろう。松浦氏はこうして出現した「イメージ」の特異性をさらに分析するために、同時代にやはり人体と動物の連続写真で名声を博したマイブリッジと、長らくマレーの助手を勤めながら結局は師から離反して、独自の映像装置の商業化を企てるにいたったドゥメニーを取り上げている。マイブリッジとマレーの眼差しのうちにひそむそれぞれの欲望の解明と、ドゥメニーの仕事を通して語られる同時代のさまざまな「動画」の試みに対するマレーの態度の分析は、ともにこれまで十分に論じられることのなかった問題点への取り組みとして、高く評価すべきものである。

第Ⅲ部「イメージ、その欲望と倫理」においては、第Ⅱ部で提起された「イメージ」の特質を、19世紀末から20世紀にかけての歴史的な文脈のなかで理論的に解明することが試みられる。ここでまず取り上げられるのは、マレーと同時代にやはり「運動映像の表象装置」の開発に取り組み、「シネマトグラフ」の発明によって映画史にその名を残すリュミエール兄弟である。「見えるものを見るがままに見せる」シネマトグラフと、「見えないものを見させる」クロノフォトグラフィとの対比を進められる第1章「シネマトグラフの手前で」は、映画に関する論考も数多く発表している松浦氏ならではの知見に富んだすぐれた論述である。続く2章ではマレーの連続写真を主たる根拠としつつ、プルーストの文学作品から抽出した「アルベルティーヌ・コンプレックス」をも引き合いに出して、哲学者・大森荘蔵の「立ち現われ一元論」に対する批判が展開される。運動は表象しえない、イメージは存在しないと大森に対して、まさしく運動の表象でありながら「イメージ」として現前するクロノフォトグラフィが有力な反証を提供するものであり、この議論によって松浦氏の提起した「イメージ」の概念の一面がより明確になったことは間違いないが、本論文全体を通して見た場合に、この部分がある異質な印象を与えてしまうのも否めない事実である。審査委員のほとんどがその点に触れ、論文全体の一貫性がややそこなわれていることが指摘された。

以上通観してきたように、本論文にはいくぶんかの瑕疵があるとはいえ、マレーという特異な存在を19世紀後半の西欧の文化史的な文脈のなかで正確に位置づけ、彼のクロノフォトグラフィがもたらした「イメージ」の意義を表象作用についての意識の転換として明晰に解き明かしている。松浦氏自身が「跋」で述べているとおり、「イメージ」については理論的な面でさらなる展開が可能だろうし、1880年代西欧におけるエピステーメーの転換という命題についてもいっそうの掘り下げが望まれるところである。その点は今後の課題としながらも、現時点での学術的成果として本論文はきわめて高度な水準に達しており、欧米語に翻訳されれば国際的にも高い評価を得られるものと判断される。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。